



アフガニスタン二都物語

A Tale of Two Cities in Afghanistan

平井奈美

HIRAI Nami

株式会社パシフィックコンサルタンツ
インターナショナル

2001年9月、米国同時多発テロをきっかけに対テロ戦争の標的となったタリバン政権。米軍の攻撃と政権崩壊、2002年1月に東京で開かれた「アフガニスタン復興支援国際会議」において、国際社会全体がアフガニスタンの再興に協力すべく始動。国際社会全体として約45億ドルを、うち日本政府は約5億ドルを地雷の撤去、教育、保健・医療、難民帰還・再定住、女性の地位向上のために支援することを決定、それを受けJICA¹が開始した「緊急復興支援」を当社が受注し、私は、カブールとカンダハールにて業務に携わった。このときの体験を簡単に紹介したい。

1. コスモポリタンな首都カブール

●1 カブール(2002年4月)

首都カブールは、東京と同緯度、標高1800mの盆地で、土色の廃墟の向こうに4000m級の雪山がそびえる非現実的な景色だった。乾燥して日差しが強く気温の日較差が大きい。よく言えばさわやかな高原気候、冬は雪景色となる。

2002年4月、隣国パキスタンの首都イスラマバードから国連機に乗り込み、乾燥した土漠色の山肌と尾根を

越えること1時間、カブール盆地に降りた。その時に目にしたのは米軍の攻撃によって裂けた数機の飛行機であった。機体は真二つに折れ、もはや鉄の塊でしかなかった。

とはいえ、さすが首都である。予想以上に町は活気に溢れ物流も活発、正直驚いた。コピー機や写真現像店のみならず、日本製テレビ、パラボラアンテナ、文房具屋にはcanon携帯型プリンターのインクカートリッジまであった。日を追うごとに車が増え、朝は通勤ラッシュで大渋滞となった。街を走る車は日本製中古車が最も多く、私の愛用車も「小島水産」と書かれたバンだった。

活気ある市場にはブルカ²を被った女性が闊歩する。ブルカからのぞく足首は、流行のセクシーな黒のレース柄タイツだ。

コスモポリタンな首都カブールには、多くの民族が共存する。パシュトゥ人、タジク人、ハザラ人がその三大民族で、お互いに刺激しないように首都カブールを形成している。共通語はタジク人、ハザラ人の話すダリ語³である。

タリバン政権は崩壊したが、アフガンのイスラム文化であることに変わりはない。国際機関・援助団体の女性

は体の線の出にくい現地風の服を愛用した。ジーンズ姿で歩いた外国人女性は痴漢にあった。ユニセフの女性職員に聞いた話であるが、国際機関に勤める外国人女性数人が頭に被りものをせず集団で歩いてみたら、車が止まり道路が渋滞してしまったそうである。

●2 プロジェクトの立ち上げ

4月のカブールは、昼間は太陽が照りつけるが朝晩は冷え込む。足りない毛布を補ってジャンパーを上掛けし、人によっては冬山用の羽毛の寝袋にもぐって眠った。

まともなホテルは皆無、僅かなゲストハウス(民宿)は援助関係者で占拠されていた。我々の宿舎は一軒家のゲストハウスで、部屋によっては5畳程度の部屋にベッドが2台、二人一部屋で机もなく、ベッド上でコンピュータを操作した。昼は調査で省庁と現場を走り回り、夕食前に団会議、夕食後は報告書作成。事務所が見つかるまでは私の女性2人部屋が団の荷物置場を兼ねた。

2003年12月に爆弾テロの被害にあったインターコンチネンタルホテルは小高い丘の上に位置し、町を見下ろすその屋上にテレビ中継機材が設置され、各国報道陣によって共同使用されていた。報道陣の集中するこのホテルに滞在していたNHKスタッフによると、宿泊費は53ドル/泊(素泊)、湯は出ずエレベーターは動かない。湯を要求すると300ドル払えと言う。無茶な話であるがホテル側にはボイラー修理費用すらなかったのである。

こういった中で私が担当したのは調査基盤の立ち上げである。まずは車輛と運転手、通訳(英語—ダリ語)等と雇用契約書を交わし毎日の業務管理を行った。想像以上に民族間の溝が深いため雇用にあたっては民族が偏らないように気を遣った。

●3 不動産事情/援助成金

幸い1995年に隣国パキスタンへユネスコのプロジェクト⁴で訪れたときに知り合った友人(当時彼はアフガン難民)が、政権崩壊後カブールに戻り仕事を立ち上げていたので、適当な不動産物件を予め探しておいてもらった。

それはカブールの一等地にあった。官庁街から車で10分程度、高級住宅街のゆったりとした庭付き一軒家を各国外務省や国連機関、NGOなどがそれぞれ借り上げて警備員を配置していた。最初は「戦禍のカブールにこんなにきちんとした壊れていない町並みがあるの

だ」と驚いたが、次に驚いたのはその賃料の高騰であった。タリバン政権崩壊後に各国ドナーが押し寄せたこのエリアでは、住人を退去させてまで外国人に貸していた。それもそのはず、先月の月額家賃450ドルの物件を、翌月外国人に月額家賃4,500ドルで貸すのである。しかも1年間分の家賃先払いを要求する。値引きは一切しない。我々の事務所は、粘った交渉の結果、かろうじて先払い家賃を1年分から半年分にしてもらえただけであった。それでも大きいのだが。

●4 急激に変わるカブール/携帯電話と外食産業

2002年4月中旬、米国資本の携帯電話会社AWCC⁵がサービスを開始した。最初はモトローラの電話機が、数ヶ月後にはNOKIAが出回った。1台260ドル程の電話機は援助関係者のみならず地元民にも購入され、あっという間に完売した。国際電話もかけられるので非常に便利だったが、電話台数が増えるにつれ回線状態が悪化した。2003年春、独占市場であった通信業界に別会社が新規参入した。良好な通話状況、定額通話サービスをバネに人気上昇中である。

7月になると、イタリア料理店、中華料理店、インド料理などの外国人向けレストランが次々とオープンした。特筆すべきは中国人の商魂の逞しさである。次々と移住してきてレストランをオープンし、アフガニスタンでは考えられない女性ウェイトレスの配置、イスラム教では禁止されている豚肉料理(肉は本国から入手との噂)の提供、その他洋風料理も交えて商売を展開した。

これらのレストランは、初めこそ外国人が目立ったものの、次第にアフガニスタン人にも人気が出た。特に、十数人のチャイニーズドレス姿の中国人女性ウェイトレスが話題の中華料理店は大変人気があった。私は、この「不道徳な」中華料理店はいつかイスラム原理主義者に爆弾を投げ込まれるに違いないと、特別な食事会以外ではできるだけ近寄らないようにしていたところ、2003年12月ついに爆弾を仕掛けられた。危ない危ない。



■写真1—破壊されたアフシャール女子校(修復前2002年4月)



■写真2—JICA緊急復興支援(筆者が参加)で修復された



■写真3—子供達(カブール)



■写真4—子供達(カブール)



■写真5—イランからアフガンを開放した英雄ミルワイス・ホタックの廟(カンダハール)



■写真6ーブルカの女性とマーケット(カンダハール)



■写真7ーコンクリートブロックを作る(カンダハール)



■写真8ー小学生の少女(カンダハール)

2. タリバンの都カンダハール

2002年10月、南部の旧都カンダハールに降り立った。カンダハールは標高800m、夏季には摂氏50度を越え、冬季は乾燥と塵と静電気、屋内の寒さに悩まされる。隣国パキスタンのパロチスタン州都クエッタから陸路5、6時間のため物流は多い。乾燥して水はけの良い大地と気温の日較差が大きいことから果樹栽培に適し、特に16種類に及ぶ葡萄、並びにザクロの生産が盛んである。かつては、アフガニスタンのフルーツバスケットと呼ばれた果樹加工工場が、商品の輸出を行っていたが長年の内戦による疲弊および長期の早魃のため、果樹加工業は下火になった。

カンダハールの住人は、殆どがパシュトゥ人で共通言語はパシュトゥ語。勇壮果敢な気質で力が強く、ソ連軍や英国軍にも屈しなかった歴史を持ち、誇り高く名誉を重んじ、そして「客人歓待」など親から子へと伝承されるパシュトゥマフレイ(パシュトゥ人の掟)を守る頑固な人々

である。イスラム原理主義を掲げたタリバンにはパシュトゥ人が多かった。

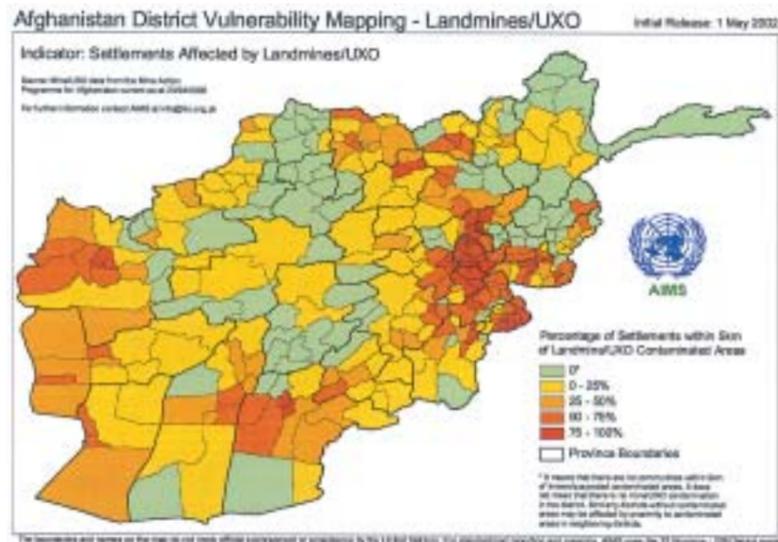
同時に、女性隔離の習慣(バルダ)の厳しさなど保守的な面が強く、道路や市場といった公共の場で女性の姿を見かけることはカブールと比較して大変少ない。稀に女性が外出するときには必ずブルカあるいはチャドル⁶をまとい全身を覆う。家庭内暴力、幼児婚、性暴力など内包される社会問題は多く、女性は教育や就業の機会を著しく制限されている。食料品や消耗品の買い物など、外出を伴う家事作業は男性の家族員が行うのが普通である。とはいえ、一歩家の中に入れば女性は外の世界に興味津々で、家にいる面白くさを訴えている。

●1 建物の中が一番寒い(2003年1月)

2003年1月、真冬とはいえコート要らずの小春日和、外はポカポカ気持ちが良い。しかし、さすが夏季の気温50度に耐える家である。一歩入ると冷蔵庫のようで、コートを着てストーブをつけ、かじかむ手に指先を切った軍手をはめないと仕事もできない。

●2 恵みの雨(2003年4月)

2003年春、4年にわたる大旱魃が続く中で恵みの雨が降った。それまで毎日スカッと快晴で日本と同じ星座が輝いていたのが、雨の降る前数日間は空に雲が出たり、月の輪郭がかすんでいたりと、珍しい現象が起こっていた。その後も雨は少しずつ降り、干上がっていたはずの川で青年が水浴びするようになり、秋に



■図1ー地雷及び不発弾の分布(2002年5月)(AIMS)

■表1ーアフガニスタン概況

面積:	652,225平方キロ(日本の約1.7倍)
人口:	約2,796万人(2002年推計)
首都:	カブール(人口約230万人)
主要都市:	カンダハール(約55万人)、ヘラート(約18万人)、マザリシャリフ(13万人)
住民:	パシュトゥ人(44%)、タジク人(25%)、ハザラ人(10%)、ウズベク人(8%)、その他(13%)
言語:	パシュトゥ語、ダリ語(ペルシャ語系)等
宗教:	イスラム教(スンニ派84%、シーア派15%)
政治体制:	イスラム国
憲法:	憲法制定ロヤ・ジルガにて制定(2004年1月)
GDP/人:	US\$180-190(2002/2003年)
主要産業:	約85%の家計が農業。労働人口の約7.3%が農業部門に従事(1999, FAO)
成人識字率:	36%(男性51%、女性21%。(2000年, ユニセフ))
小学校就学率:	1995年時点:男子64%、女子32% 2001年時点:男子39%、女子3%(タリバン政権の結果)
乳児死亡率:	165人/1000人(2001年、日本の約25倍)
5歳未満死亡率:	257人/1000人
妊産婦死亡率:	1700人/10万人(日本の約200倍。ほとんどが自宅出産と推定)
出生時平均余命:	約43歳(2001年)(2003)
資源:	天然ガス、石炭、石油、鉄鉱石など
通貨:	アフガニ(Afghani)、1\$=43 アフガニ(2004年1月28日現在)

<アフガニスタン・停戦と復興の経緯>

アフガニスタンでは1979年末の旧ソ連軍の侵攻以降23年間にわたる内戦によりインフラは破壊され、社会システムは崩壊、そして人々には精神的傷跡が残った。

タリバン政権に代わるアフガン統治の枠組み作りのため、2001年12月ボン合意にてカルザイ氏が暫定統治機構の議長に選ばれアフガニスタンは和平への道を歩み出した。2002年6月、暫定政権を引継ぎカルザイ氏が移行政権の大統領に就任。

2004年1月、新憲法が制定された。2004年6月頃に総選挙にて正式政権を樹立する予定であるが、爆弾テロが各地で勃発するなど治安回復は見られず先行き不透明、また民族²分布が幅広く、内戦時代から続く地方軍閥支配が今でも残り国民国家としての一体性は弱い状態である。

2表1参照

は大振りのザクロが収穫された。

●3 砂嵐(2003年5月)

生まれて初めて砂嵐を体験した。午後4時頃、かんかに晴れた空がいきなり夕立のように薄暗くなった。恵みの雨か!と外へ飛び出すと、埃なのか細かい砂なのか判別できない塵が吹きつけ、目を開けていられなくなり建物に飛び込んだ。空は黒みかかった赤に染まり、まるで赤黒い霧がかかったように、すぐ隣の建物や樹木の輪郭がおぼろげになった。

15分ほどすると徐々に色が変わってきた。景色を隠す赤い霧はオレンジの霧になり、土漠色の霧になり…景色全体がぼんやり薄黄色に変わり輪郭線が戻ってきた。車に乗り込んでワイパーを動かすと、砂埃は茶色の液体のような動きで窓ガラスの端に移動した。

砂嵐が止むのを待ちながら米軍がイラク派兵時期を検討していたニュースを思い出した。こんな砂嵐が頻繁に起こるのだろうか。車もコンピュータも武器も、内部に砂埃が侵入して誤作動するかもしれない。第一人間が動けない。そういうことか、と一人妙に納得していた。

3. 続くアフガニスタンへの協力と地雷除去

現在もアフガニスタンへの協力は続いている。私が携わったプロジェクトでは学校改修/建設、病院改修、道路改修などインフラの復旧を中心に行ったが、他にも様々な課題に対して取り組みがなされている。例えば、帰還難民支援、地雷撤去、食料、井戸、難民キャンプ、女性の識字、戦争未亡人や除隊兵士のための職業訓練、教員の質の向上、母子保健、感染病予防、衛生教育、女性の地位向上など多岐に亘る。

特に、現地の人々の生活を脅かし続ける地雷については、早期解決が望まれる。地雷処理がなされた土地には処理済表示、未処理の土地には赤い石が置かれている。地雷や不発弾は図1に示す通り、まだ全土に多く残っている。

4. 今後に向けて

アフガニスタンはまだトンネルを走っている。タリバン政権崩壊によって強盗事件が増えるなど治安が悪化し、退廃的な文化が復活したのも現実である。国際社会の援助も良い面も悪い面もある。援助物資が闇へ流れていることも多い。

しかし、町や周囲の人々を見ていると少しずつ変わり始めたとも思える。アフガニスタンは、東西交易の中継地としての発達、イスラム教の影響、パミールの少数民族の人々、そして破壊されたパーミヤンの大仏に代表されるような仏教文化を育んだ、文化の多様性に富む奥深い地である。ここに住む人々が、彼らの土地のアイデンティティを知り、長い歴史を学び、誇って語れるようになる平和を取り戻すことを祈り、結びとしたい。

なお、現地の様子を掲載した。少しでも現地の雰囲気が伝わればと思う。

1 当時の国際協力事業団、2003年10月より独立行政法人国際協力機構になった。理事長は緒方貞子。
2 頭の先から足首までを覆い隠す女性用外出着。目の部分は細かい刺繍とレースが施され、中から外を見ることはできる。
3 ペルシャ語と95%以上の互換性を持つと言われている。
4 ユネスコ日本信託基金「ガンダーラ遺跡保存計画」に恩師である奈良女子大学の増井正哉先生(偶然にも本誌本号に原稿を寄せておられる)の下で参加した(1995、1996年)。それをきっかけに筆者は国際協力の世界に飛び込むことになった。
5 Afghanistan Wireless Communication Company
6 目以外全身を覆う大型のショール